

海外駐在員の妻の異文化受容と帰国文化適応-アメリカ滞在の場合-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科 公開日: 2014-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊佐, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16660

海外駐在員の妻の異文化受容と帰国文化適応

—アメリカ滞在の場合—

講義編¹

沖縄キリスト教学院大学
伊佐雅子

1. はじめに

異文化適応や帰国文化適応の研究では、留学生、ビジネスマン、子どもたちに関する調査は実施されてきたが、海外赴任を命じられた夫に伴って海外へ渡航した企業駐在員の妻に関する研究は少ない（大西、1990；三善、1998、1999）。ほとんどの妻たちは仕事を辞め、主婦（＝妻）として夫を支えるために海外に同行しているので、これまでの異文化適応研究の中ではあまり重要視されてこなかった。近年の研究では海外駐在員や留学生といった他のグループに比べ、海外駐在員の妻は渡航理由が自発的でないため、現地に適応しにくいことが報告されている（秋山、1999）。また、妻の異文化適応の悪さが、海外派遣者の途中帰任や失敗の最大の要因となっていることが明らかにされている（佐藤、2003）。従って、文化間の移動が可能なグローバル化の時代において、海外駐在員の妻の異文化適応研究は重要であると考えられる。

本講義では、筆者が実施した、アメリカに滞在した海外駐在員の妻たちの帰国文化適応問題に関する調査結果を紹介する。まず、最初に、妻の帰国後の適応問題を述べる。その後、帰国後の適応問題は、滞在中の生活と深く関連しているので、彼女たちのアメリカでの異文化受容の特性を明らかにする。

2. 先行研究

これまでの異文化研究は、臨床心理学、コミュニケーション学、教育学、社会学、文化人

¹本稿は、2012年12月14日の明治大学大学院の授業『情報コミュニケーション学学際研究』において行われた講演の採録をコーディネータによって編集したのですが、紙幅等の都合上、文体表現を変更させていただいた箇所があります（報告・討論編も同様）。また、わざわざ遠くからお越しになり、大変興味深い講演をなさって下さった伊佐先生に、心から感謝しております。

類学の分野で行われてきた。コミュニケーション学では、文化変数アプローチ (Church, 1982) がよく用いられた。つまり、適応とは異文化の人とのコミュニケーション状況に影響する文化変数を理解することである。この文化変数アプローチでは、背景要因 (性差、年齢、学歴、以前の異文化経験、国籍)、異文化要因 (滞在地、滞在期間、異文化でのコミュニケーションの度合い、価値観の変化、帰国準備、滞在中の母国の情報)、帰国後の要因 (帰国の場所、帰国に対する心理的準備) という3つの変数が提唱されている。

また、近年、帰国後の対人コミュニケーション研究は増えている。その中、帰国後のビジネスマンや学生の異文化適応研究が数多く報告されている (Brabant, Palmer & Gramling, 1990 ; Gullahorn & Gullahorn, 1963 ; Rohrlich & Martin, 1991 ; Uehara, 1986)。しかし、企業駐在員の妻に関する研究は比較的少ないと考えられる (大塩, 1988 ; Pryately, 1989 ; ムトー, 1993 ; 佐藤, 2000, 2001, 2003)。佐藤 (2000) は、海外駐在員妻の異文化適応問題を、主に語学力不足、滞在国の制度 (教育や治安)、文化の違い (習慣)、現地社会や現地の日本人社会との対人関係、日本への帰属意識 (日本食材の不足) といった5つのグループに分類した。社会学の分野では、ジェンダーロールという概念を用いて、駐在員妻の研究は行われている (Yamada, 1993 ; Verthelyi, 1995)。それは、海外に行った場合、異文化適応の中で、どのように性差を受け入れるかは女性のメンタルヘルス、すなわち女性のカルチャー・ショックの度合いに影響するというものである。Kamo (1993) は、ジェンダーロールと結婚生活の満足度の関係性に着目し、日米の夫婦の生活の満足度がどのように異なっているかを研究している。日本人夫婦は経済的側面、すなわち地位、収入などを重視しているのに対し、アメリカ人夫婦は愛情表現を重視しているという結果が示された。

3. 研究方法

本研究では現象学と解釈学的アプローチを用いた。解釈学という用語はギリシャ語の「ヘルメーネウエイン (hermeneuein)」から由来したものである。「解釈」という語は多義的であるが、ギリシャ語においては、1) 言表・表現すること、2) 説明・解釈すること、3) 翻訳・通訳することという3つの意味をもっている。解釈学は、意味不明な言葉や事柄を理解可能な言語で表現し、他者に伝達するための技法であり、行動やテキスト (あらゆる文化現象) を解釈することによる理解の研究である。ドイツの哲学者ディルタイ (Dilthey) によると、人間の生活やあらゆる分野の芸術品を理解するのは、自然科学的にみられる還元的方法ばかりではなく、全体的解釈を通してである (Ulin, 1984)。人間のコミュニケーションに含まれる解釈学的プロセスには、歴史的、文化的、言語的、経済的、教育的な文脈が含まれている。つまり、私たちは、我々自身、つまり自分の見方を避けては通れないことを意味する。また、ハイデガー (Heidegger) はディルタイの歴史性の概念を個人レベル (伝記) に拡張していった。人の伝記は、広範囲な歴史に影響されている。ハイデガーは、理解とは現存性がそれ自

身を連続的に想像（投影）する未来と本質的に関連していると考えていた。さらに、ガダマーは「Prejudice」の概念（ここでは偏見ではなく、先入見と訳す）を用い、人間は常にある特定の文化＝伝統の中に所属しており、一定の先入見の中に投げ込まれていると主張した。先入見は、我々がものを見、考えることを可能にする地平である。これまでのコミュニケーション学では、先入見はマイナスの意味として捉えられているが、ガダマーはプラスの概念を提唱した。ガダマーにとって、先入見は歴史的理解の基礎で、一方で理解を制限するが、他方では理解を促進する働きをし、我々が理解をすることを可能にしてくれる。理解とは再構成ではなく、仲介であり、過去の意味を現在の状況に移し替えることである。過去を理解することは、過去の心理要求を現在の状況に適用することで、過去の地平と現在の地平が融合することである。理解とは歴史的、言語的、循環的なものである。理解が言語的であるというのは、言語がただ単に「道具」ではないことを意味する。我々は言語を通して、言語コミュニティに入っており、人々の総合主観的な世界を理解する。理解が循環的であるというのは、我々が物事を理解する際、部分は全体から理解されねばならず、全体は部分から理解されなければならないという「全体と部分との循環」のことである。

現象学とは、ギリシャ語の *phainomenon*（現れ）と *logos*（理性）を結びつけて作られたものである。つまり、現象学とは現れてくる物事の固有の本質を発見する学問である（Stewart & Mickunas, 1990）。現れとは、人が意識しているものすべてである。知覚として、イメージとして、経験として、思想として、習慣として、仮説としてなど様々な方法として我々の心の中に観察されるものが現象である。現象学は、ある特定の意味が経験の中でどのように表れているのかを明らかにする。数多くの女性たちはアメリカや中国をはじめ、世界各国に滞在しているため、各自の体験は異なっている。彼女たちの体験を一般化するのは一つの道であるが、現象学では、様々な体験をした人々のインタビューを通して共通の特性を見つけるのである。また、現象学的観点からは、文化とは世界への象徴的人間関係のネットワークであると言える。この場合の人間関係とは、人間の世界を事実の世界としてではなく、「意味」と「価値」と関連した「関係の世界」として捉えることである（竹田、2004）。つまり、ある文化には文化特有の人たちの関わり方が見られることである。

4. 調査結果

4.1 調査参加者（対象者）

本調査の対象者は、帰国後、東京、静岡、大阪、神戸に住んでいる28人の日本人主婦たちである。彼女たちは日系企業が多く進出しているアメリカの西海岸と東海岸に2年半以上の滞在経験を持っている。28人の対象者のうち、30代は7人、40代は18人、50代は3人である。彼女たちの夫は精密機械、電機関係、機械関係、家電、車、建設などの仕事に就いている。聞

き取り調査は、渡米以前の生活からアメリカでの生活、そして帰国後の生活について、比較的自由に語ってもらった。約1時間の聞き取り調査は予定していたが、その場の雰囲気などに応じて、45分で終わることもあれば2時間かかることもあった。

4.2 分析方法

この調査ではフッサール (Husserl) による現象学的方法の3つのステップを用いた。現象学的方法の第1のステップは、エポケー (Epoche) である。これは、ギリシャ語で判断を控えるという意味である。フッサールによれば、現象学では重要なのははっきりした基盤 (基礎) を設立するまでは、全ての事柄についての判断を控えることである (Stewart and Mickunas, 1990)。言い換えれば、人間がごく普通に持っている世界に対する素朴なドクサ (=確信) とそれへの信憑 (自然的態度) を控えることである。第2ステップとは、現象を述べる。ミル (Mill, 1990) によれば、記述する (描写) ということは「ある個々の物と、使用する言葉の外延を表す物か、または内包する物との間の連結を確認することである」(p.3)。この描写は、現象の分類に基づくものである。現象学的描写の主要な機能は、聞き手の現象に対する実際の経験や、または潜在的経験への信頼すべき指針 (道標) として役立つことである。第3ステップは、想像自由変様 (imaginative free variation = thought experiment) である。これはただ単に思考するのではなく、現実のあるいは観念のまなざしを自由にむけかえることである。経験上のデータを用いながら高度に組織された、論理的な操作である。この想像自由変様を通して、共通する特性を孤立化することができる。面接データから主題 (テーマ) を見つけ出すためには、常時比較方法 (Constant comparative method) を用いた。つまり、筆者は面接の時の原稿を何度も読み、まず、最初に日本人の主婦たち (母親) の帰国文化ショックと再適応問題に関連する言葉や語句があるかどうかを探した。28人のインタビュー原稿に対してこのやり方を繰り返し、1つのデータと他のものを何度も比較した。次に、参加者たちの面接データに共有するパターン (または共通点) を見つけ出そうとした。また、帰国文化ショックを強く感じた人たちの例に注目し、その原因を見つけようとした。この過程は常時継続的であり、母親たちが共有する要素を明らかにするために、何度もテープを聞き、原文を吟味した。

4.3 調査結果

インタビューを通して、28人の主婦たちがどのような帰国文化ショックを経験したかを明らかにし、11のテーマにまとめられた。これらのテーマの選定は、28人の主婦たちにみられる共通性やカルチャー・ショックの度合や経験の特異さに基づくもので、筆者の研究対象の興味から抽出したものではない。

テーマ1 日本に戻りたくなかったが、帰国しなければならなかった

テーマ1は、主婦たちは日本に戻りたくなかったが、帰国しなければならなかった気持ちである。様々な理由のため、ほとんどの主婦たちはアメリカに残りたかったことを強調した。しかし、子どもの教育に対する心配と子どもの将来に対する不安や、子どもがアメリカ人的になっていることへの悩み、そして、最終的には予期せぬ海外赴任の終結のため、帰国することを決心した。

テーマ2 パセプションの変化：異なる空間

テーマ2は、主婦たちはアメリカと日本の空間の違いによるなんらかの戸惑いを経験することである。海外で長期間生活すると、人のパセプション（知覚、認識）は変化する。なぜなら、異なる空間（知覚世界）にふれるからである。帰国した主婦たちが、アメリカでは広い空間と人口が密集していないことを楽しんだが、日本では公的空間や商店街などの人込みにはとても耐えられなかったと述べている。

テーマ3 生活の質の変化（物価高）

パセプションの変化に加えて、帰国した主婦たちは日本とアメリカの生活の質の違いをひしひしと感じ、そのことが主婦の再適応に影響を与える。日本では主婦が家計のやりくりをしているため、物価の高さは主婦を悩ませ、フラストレーションを感じさせる。インタビューした全員の主婦たちが、日本は物価が高いこと、人込みが多いこと、生活空間が大変狭いことを述べている。

テーマ4 アメリカ人男性と日本人男性のマナーの違い

帰国した主婦たちは、日本人男性の行動がアメリカ人男性とは異なる点について不快を感じている。主婦たちは一歩進んだ夫婦関係である性差平等的役割志向の国であるアメリカで長年生活しているので、男性に対する見方が変化する。一般的に言って、アメリカ人の男性は親切で、礼儀正しく、はっきり物を言い、感情表現に富む。一方、日本人男性は控えめで、言葉ではっきり感情を表現しようとしなないし、女性に対する敬意があまりみられない。帰国した主婦たちのほとんどは日本人男性もアメリカ人男性と同じような行動をとってくれることを期待するため、もし、そうでない場合、この状況は彼女たちに不快感を与えてしまう。

テーマ5 子どもの教育に対する母親の心配・悩み

日本での母親の重要な役割は、子どもを育て、立派に教育することである。日本人の主婦に人生の目的を与えるのは母親業である。しかし、ほとんどの場合、日本の学校システムへの移行はスムーズではなく、子どもの学校への不適応等の問題がみられ、子どもたちや母親

たちは長期間にわたって心理的にも、感情的にも苦しみを経験する。本調査では、入学試験の失敗、授業についていけない問題、いじめ問題、教師の保守的態度、進学受験といった帰国子女としての子どもたちと母親たちが直面している問題が明らかになった。

テーマ6 主婦の友達と隣人との付き合いの問題

他者とコミュニケーションを通じて主婦たちは日本社会に再入していく。主婦たちの海外滞在による価値観の変化はコミュニケーション行動に表れているため、友人や隣人や親戚からは変人に見られたり、否定的にとられたりする。この「否定的または、変わった行動」の結果として、主婦たちは帰国後、友たちからの援助や支援を受けることができない。さらに、深刻なことは、友たちや隣人から受け入れられなくなっていることに突然気づくことである。主婦たちは友たちや隣人や社会に拒絶され、社会的に、心理的プレッシャーを感じている。

テーマ7 親戚と家族に関する問題

テーマ6と関連して、テーマ7は親戚と家族に関する問題である。例えば、親戚の人たちは主婦たちの家族の海外生活を理解できない。海外駐在員とその家族にとって一番つらいことは、肉親の死を海外で聞くことである。海外赴任のため、死の知らせを聞いてもすぐには帰国できない。彼らは両親が安らかに眠ってくれることを海外から祈るしかない。しかし、日本にいる親戚たちは海外駐在員とその家族の苦しみや悲しみを理解できない。また、帰国した主婦たちは、アメリカで身につけた合理的な考え方をしているので、日本の習慣、例えば日本の贈り物の季節や儀式的行事の習慣を理解できず、それらに従うことが大変であると述べている。

テーマ8 夫に関する問題

夫である企業駐在員の国内の会社や社会的環境への本国帰還は、家族の悩みと同様に夫にも影響を与えている。帰還者は本国の会社や社会的環境をよく理解していないため、予期せぬ帰国文化ショックを受けたり、喪失感や孤立感を感じたりしてしまう (Harvey, 1983)。日本人主婦の仕事は子どもだけではなく、夫の世話をすることも含まれる。帰国後は、夫も帰国文化適応問題を抱えているため、これが妻の生活に影響する。本調査では、夫の長い勤務時間、人間関係、多すぎる出張、適職の不足といった問題点が明らかになった。

テーマ9 夫婦関係の変化

海外で何年生活したことのある人たちは異なる文化にふれるため、文化的視野が広がる。主婦として、母親として、ほとんどの人たちが家では伝統的役割を果たしてきた。日本人女性の主婦としての役割に対して、疑問を持つことはほとんどなかった。しかし、アメリカ滞

在中は、自由な時間があったため、ボランティア活動、趣味やスポーツクラブ、女性の集まり、教会での行事など様々な活動に主婦たちは参加した。また、自宅でパーティーを開き、アメリカ人の友たちを招いたりして、親密につきあった。これらの活動を通じて、主婦たちは自分の役割や生活を客観的に見つめることになる。時には、日本での生活に関する質問を受け、母親／妻としての生活を思い、考え始めた。主婦たちは日本人女性とアメリカ人女性との間には大きな差異があることに気付いた。このように、主婦たちは考えれば考えるほど、アメリカ人女性の役割に影響を受けた。このような生き方に感銘し、受容していくと、帰国後に日本社会に適応してゆく時にはフラストレーションとストレスがたまる。

テーマ10 仕事が見つからない

日本では夫が海外赴任する場合、妻は自分の仕事を辞めることが暗黙のうちに了解されている。しかし、帰国後、子どもの問題が一段落したら、母親は自分のことを考えるようになり、外で仕事をしたいと思うことが多い。本調査の対象者のうち、帰国時の主婦の年齢はほとんど30代と40代である。彼女たちは学歴が高く、就業に対する意欲がみられたが、年齢制限のため仕事に再び就く機会を失っていた。

テーマ11 帰国後、アメリカ滞在中のような活動的な生活を維持できない

主婦たちは、滞在中、アメリカ的な時間の使い方を学び、余暇活動に積極的に参加した。特にボランティア活動、趣味のサークル、スポーツのサークルや旅行などの様々な活動に従事することで、エネルギーになり自分の生活について前向きになる。ところが、日本に戻ると社会的環境が異なるためそのような活動ができなくなる。そのことが主婦たちにストレスを与えている。

5. 考察

上述のように、インタビューデータから11のテーマが浮かび上がってきた。11のテーマは空間、時間、感情の主題の下に、4つのサブテーマに分けられた。これらは、1)日本の大都市の中の空間、時間、感情、2)日本の企業・学校組織の中の時間、空間、感情、3)日本人の対人関係の中の空間、時間、感情、4)日本の男女間における空間的、時間的、感情的分離である。

日本人主婦たちの帰国適応問題について、現象学的にみれば、馴染みのあるところ（アメリカ）から離れて、未知の環境（日本）に置かれてしまっていたため、彼女たちの生活は混乱している。この空間と時間とは外的なものだけを示すのではなく、現象学では大変重要な意味を持っている。

フッサール (Husserl) によると、経験というのはある基本的な状態 (空間と時間) の観点で構成されており、これらの2つの状態は経験の重要な次元である。空間と時間は、人間が外界を認識する際にそこにア・プリオリに働く枠組みのようなものである。空間・時間は人間の知識を支える最も基本的な共通の枠組みである。光が目にあたるとき、または音が耳に聞こえるとき、空間・時間の形式は我々の感覚的経験への基本的な受容力を形づくる。

時間は日常生活の中で本質的な要素である。フッサールは時間性 (Temporality) とは、意識の本質の一部であり、またすべての経験の本質の一部であると認識していた。ハイデガーは、世界とのかかわりにおいて意味を明らかにしてゆく現存性 (人間) は、時間の流れの中にあると考えていた。確かに、人間は過去、現在、未来という時間を抱え込んで存在している。その中で未来の可能性を見出そうとしながら現在を生活している。ハイデガーによれば、時間は人間が死に向かう中に内在するものである。ここでは常識的な意味での時間の流れを問題にしているのではなく、時間が時間として構成される最も根源的な形態とはどのようなものかを問題としている (滝浦、1976)。そして、それは、我々がおのれへの死へと「先駆」するときだと彼は言う。死は現存在にとって最も本来的な可能性であり、生きる目標である。従って、滝浦によれば、人間が本来的にせよ非本来的にせよ「死に臨む存在」としておのれの究極的可能性への到来を生活しているという意味で、人間は「将来的存在」と呼ばれている。

それぞれの文化には文化特有の時間・空間の骨組みがみられる。時間・空間はある文化の人たちがどのように世界を経験しているのかを明らかにしてくれる (Hall, 1983)。異なる文化では時間・空間が異なったように構成され、理解される。要約すれば、異なる文化に住む人たちは異なる感覚世界に住んでおり、また、同じ感覚の割合を使わないということである。それゆえに、ある文化の人にとって手がかりとなる連想や反応はある文化の人たちには別のことを意味する。

人類学者の澤田 (1996) は長年にわたる現地での参与観察による調査を通して、感覚経験の違いを指摘している。「感覚の働き方が変わるとは、身体を通して外部世界と交流する、そのやり方が変わるということである」(P.222)。感覚の働かせ方の違いは、感覚印象の違いであり、とりもなおさず人々の生活が根ざす基盤の違いを意味し、ある意味では世界に対する主体の態度、あるいは「身構え」の違いである。つまり、空間・時間が違うということは、その文化の人たちと同じ感覚経験を共有していないこと、および世界に対する態度の違いという人間存在と関連している。

ゲブサー (1974) は、時間と空間は全ての文化・文明にみられる基本的な形態として理解すべきであると述べている。これらは、ある文化・文明の中の自己と世界理解の形態の根本的な構造を形成しているからである。自己と世界理解の形態に変化がみられるのは、ある特別な経験が優位に顕在しているからである。この考えに従えば、主婦たちの帰国適応の現象

は日本での経験の特別なかたちを明らかにしている。それゆえに、主婦たちのアメリカと日本の生活経験を時間・空間の観点から分析することは有意義であると思われる。

また、異なる文化で育った人たちは、子供の時に無意識に空間と時間について学ぶ。ギブソン (1950) によれば、知覚は記憶または過去の刺激によって左右され、過去の経験が現在の知覚の土台となる。主婦たちが長時間外国で生活すると、その文化の空間と時間の感覚を無意識に習得する。それゆえに、彼女たちの時間と空間に対する見解は変化する。時間と空間は人々の行動パターンを形づくる超越的形態である。文化の中での空間と時間の使い方を共有していないということは、人々の生活が根差す基盤が異なっていることを意味するため、その文化の礼儀にかなったやり方で行動することは難しくなる。このように、空間と時間は帰国文化ショックの要因やその後の適応問題を引き起こす重要な手がかりを提供してくれる。

さらに、未知への環境への遭遇やその後連続的に生じる問題は、驚き、不安、心配、憂鬱などの感情を引き起こす。心理学的用語で言えば、「感情は自己と環境の間に出現する多面的相互作用としてつくられるもので、もっと厳密に言えば、個人の環境への解釈と言える」

(Bowers, Metts and Duncanson, 1995, p. 506)。一般的に、女性は男性よりも全ての人間行動の中での感情的要素が多い (Miller, 1986)。この調査では、友人や滞在先に対する気持ち、または怒り、苛立ち、過去を懐かしむ気持ち、孤独、憂鬱、悲しみなどの気持ちが、主婦の帰国経験の中にはっきり現れていた。

1)日本の大都市の中の空間、時間、感情

日本での空間の視覚組織には柔軟性があり、常時再構成されていると言われる (Davis, 1983)。人と自然が調和して生活しているので、空間は再び発見され、無限の遠近法が用いられる。この考えは、「間」として知られる日本人の空間概念の中に顕著にみられる。日本人の「間」とは、可能性としての絶え間ない流れにおける空間・時間を表現する。日本人にとって「間」とは、それ自身による何かではなく、過程であり物理的環境とあらゆる使用によって変化してゆくものと言える。例えば、部屋の内部では、日本人は部屋の周辺を開け、中央に物を置く。こたつは部屋の中心を位置づける。全部の部屋を暖めないが、局部的に暖める。家族が食事をする時や、お茶を飲み会話をするために集まる時、暖かい雰囲気がかもし出される。全てのものにその雰囲気が充満し、「居心地のよい」空間／雰囲気を作り出している。

一方、アメリカ文化では視覚と空間の知覚は異なる形態をとる (Davis, 1983)。アメリカ人の空間の使い方 (または見解) には、意識の精神的構造、つまり、遠近法的世界がみられる (ゲブサー、1984)。アメリカ人の経験の基本的分野は聴覚的というよりも視覚的である。視覚中心の世界では、行動はある特定の物に対してなされ、みるためには動かなければいけない。この世界は、自分を動かさないで、人生の音のリズムに調音する聴覚世界と対比する

(Mickunas, 1973)。聴覚志向は我々の周辺の世界に調子を合わせている。しかし、視覚志向は視覚の線に沿って起こり、客体の世界において主体として我々をつきとめようとする。つまり、この世界では物体が様々な距離に置かれ、空間が分離化され測定される領域となる。従って、人の活動は目的志向となり、行動は組織立てられているので圧倒的に合理的となる。アメリカ人にとっては、みることは信じることである。そこで、空間をプロセスとしてよりも物体を観察する傾向がみられる。アメリカ人は空間について考えたり語ったりする時は、彼らは物の間の距離を念頭においている (Hall, 1966)。つまり、空間を空虚だとみる。西洋の人は間を「行動を読むこと」と考える。したがって、空間は西洋の建築家たちにとっては日本のような常時の流れの可能性としてではなく、空間化と時間化の組み合わせとして用いられる (Thompson, 1984)。アメリカの家の中は空間的に仕切られ、それぞれの空間は居間、寝室、ダイニングルームと呼ばれる。各部屋はそれ特有の家具がみられ、はっきりとした特性がある。ここでは、空間は人と行動を分類する方法としての場所である。それぞれの異なる活動によって人は部屋を移動する。

このように、日本とアメリカの空間の違いばかりではなく、空間の視覚組織の違いが帰国した主婦たちの知覚を混乱させ、これが帰国文化ショックに影響を与えている。彼女たちが帰国後、都会での生活の中で、道路が狭いとか、人込みで混雑しているとか、狭い家が多いと見なすのは、アメリカ生活で学んだ遠近的世界がみられるからである。遠近的世界とは、第3視点が加わったことにより、自己および他人を客観的にみることができるようになったことである。遠近的視覚を持つ人は空間に関して、自らを観察者としてみる力を持つ。彼らの経験の基本的分野は聴覚的であるというよりも、むしろ視覚的である。空間はその場所から出現する。つまり、人が空間を所有するかどうかは遠近法的視覚を持つ人にとっては主要な関心事となる (Gebser, 1984)。ゲブサーによれば、「空間を対象化し、限定化するためには意識のある『自我』が要求される。これは空間に直面するためである」(p.10)。このように、主婦たちの遠近的意識・世界の構造は空間の認識と自我の出現の中に根づいている。

都市は時間に向かって行動させる。都市に住む人たちに共通することは現在の経験と将来への期待である。都市の人たちは時間と一緒に進行しているので、主婦たちも帰国後は都市の人たちと同じような経験を持つことになる。滞在中、主婦たちは新しい時間の使い方を学んでいる。言い換えれば、主婦たちはアメリカで時間を創造する (creating time) という出来事を規定することで生活に適応してきたと言える。例えば、彼女たちは自分で車を運転することで空間と時間を拡大することができた。しかし、帰国後は、滞在中と同じ活動的な生活を送りたいと思うが、都市では交通機関に依存しなければいけないので、彼女たちはこの生活を維持することは困難であることに気付く。いつでもどこでも自由に外出できないもどかしさ、つまり、自分の生活を自由に送れないことと、空間と時間を超えられないことへの不満を帰国主婦たちが指摘している。

2)日本の企業・学校組織の中の空間、時間と感情

帰国後、主婦たちを悩ましているのは、子どもの教育の問題と夫の会社への再適応である。夫の問題では長い勤務時間と人間関係の問題、多すぎる出張、組織的・キャリアの問題（適職の不足）等があり、子供の問題では入学試験の失敗、授業についていけない問題、いじめ、教師たちの保守的な態度等がある。

日本の企業組織と学校組織には共通した点がみられる。つまり、両者とも同じような文化がみられる。父親はほとんどの時間を会社で働き、子供たちは学校で勉強に時間を割く。つまり、両方の組織は目的志向であると言える。日本の企業では、長時間労働、同僚との付き合い、度重なる国内出張や海外出張は父親とその家族にストレスと不安を増大させる。帰国するとキャリアパスにおける修正と同様に新しいポジションの曖昧さを経験している。管理職の人たちは、海外での地位よりも低い権威でもって働かなくてはならない。日本の企業は中年層の人たちによって支えられているので、海外から帰国してきた40代や50代のほとんどの人たちは極端な忙しさを経験する。夫は家族のため、特に子供の教育費や住宅ローンの返済のため一生懸命働く必要がある。

子供は入試地獄に準備するため、塾に通い、特に高校生たちは長時間勉強する。アメリカの一年の授業日数は180日であるが、日本のそれは240日である。父親の都合で海外に行き滞在した子どもたちにとっては、帰国後日本の教育システムに即座に適応していくことは大変困難である。また、アメリカの教育は言葉の表現を奨励することで創造性と個性を育てることに重点を置いているが、従来の日本の教育は受け身に基づく暗記を強調し、蓄積された知識を重んじると言える。そのため、日本の教育から短期間離れていた帰国子女たちはこの知識体系の必須の部分が欠如しているので、学校教育の中に適応していくことは楽ではないのかもしれない。教師たちは生徒に知識を伝達するのであれ、よい人間を育てようとするのであれ、この教育システムの中では大変重要な役割を果たす。学校の教師たちのほとんどは前者（知識の伝達）の役割を大変重要だと考えている。教師たちは生徒たちを厳しく管理するばかりではなく、学校当局たち（校長や教育長）も教師たちに対して管理の目を見張らせている。秩序と規律とともに集団と権威への忠誠、他人への思いやりと尊敬のような望ましい行動をもたらす一方、個々人の自由と個性の成長を制限するようである（Kataoka, 1992）。帰国児童・生徒は、日本にいる子どもたちとは同じ教育学習経験を共有していない。彼らは教育や先生たちや自分自身に対して、新しい態度を身に付けている。このように日米の教授法の違いが、帰国子女たちが日本の教室の中に再適応していくことを困難にさせている。

帰国子女の適応を阻害しているもう1つの要因は、支配グループから行使されている力である。帰国後は、日本で生存してゆくためには企業や学校の集団規範に再適応しなければならない。力は支配されるグループの自由を制限する。日本では、帰国者たちは海外生活の経

験を通じて異なる規範を身に付けているため、マイノリティと見なされる。さらに、日本では内と外の意識が強い。中根（1972）によれば、我々と他者という意識が強いところでは、感情が激しくなるので、「我々」以外の人たちはもはや人間ではないと思えるような人間関係の極端な対比が社会の中で生まれてくる。この状況は強い地方主義に通じる。支配グループは他者に何が起きているかについて、はっきりとした考えを持たない。海外から帰国した人たちの問題は自分の所属を失い、孤立した局外者となることである。それゆえに、帰国児童・生徒たちや父親たちにとって、母国の文化に再び適応していくことは容易ではない。

このように、子どもの教育問題や夫の会社への適応問題は大きく主婦の生活に影響する。特に子どもの問題に関しては、夫は仕事で忙しいので母親自身で対処していかなければならない。ほとんどの母親たちは大都市に住んでいるため、身内・親族からの援助も期待できず、近所の友人も彼女たちの内面の状況や苦しみを本当の意味で理解することはできない。その結果、母親たちは子どもの問題に対して自分を責めがちである。一方、日本人男性のほとんどは仕事のことを妻には話さないため、夫が仕事の問題で悩んでいることに気付くのは妻にとっては難しい。夫が病気になるまで初めて、妻はこの問題の深刻さを認識する。これでは手遅れである。彼女たちは夫の病気についても自分に責任があると責める。この状況は主婦たちには耐え難い問題である。

3)日本人の対人関係の中の空間、時間と感情

このサブテーマには、親戚と家族に関する問題が含まれる。例えば、親戚の人たちが帰国してきた家族の海外生活について理解してくれなかったり、主婦たちが日本の習慣を理解できなかったりすること等である。これらの問題は、主婦たちが日本を離れて、数年間米国に滞在することで人との絆が弱くなったり、関係が切れてしまったことによる。また、主婦たちは海外に出たことで日本の伝統を客観的にみることができると、批判的になったりすることが再適応するときの障害となる。これらのことから、日本人の人間関係の特性を検討し、主婦たちの対人関係の問題を分析する。

日本人の人間関係は行為によって構成され、時間と空間の中に存在するという考えは多くの学者によって同意されている（Kumon, 1982; Lebra, 1976; Maraini, 1975; Nakane, 1970; Nakamura, 1968; Bachnik, 1986）。日本語がこれらの概念を端的に表している。人間関係とは行為を意味する言葉である。「にん」は、「人や人々」で、「げん」は「空間」「間の空間」「時間の空間」や「距離」を指す。人間という言葉は関係という言葉としばしば一緒に用いられる。人間とは絶えず、何らかの人間関係に従事しており、決して1人ではないことを示している（Smith, 1983）。

時間は日本の社会生活慣習において、なくてはならないものである。日常生活において時間は直線的に進行するが、社会の慣習での時間はさらに質的基盤を持つ。つまり季節と個人

の過去における出来事の回顧に、より直接に依存している (Backnik, 1986)。文化人類学者は一般的にこれを「人間的時間 (human time)」と呼んでいる。例えば、贈り物の季節では時間は円環的に経験される。人間関係は時間の中で経験され、時間は「他者」との対話として関係を構成する。スミスによれば、「日本人の自己と他者の両方は関係の観点でのみ表現され、自己か他者という固定した点は見られない」(p. 77) と論じている。日本人の自己と他者は絆で相互に連結されている (中根, 1972)。言い換えれば、自己と他者との相互作用によって構成されていると言える。日本に贈り物のいくつかの主要な季節がみられる。新年のお年玉、年末のお歳暮、夏の中頃の中元である。中元と歳暮は感謝の気持ちを表現するために高い地位の人たちに贈られる。特に贈り物は家から家や、会社から会社への感謝を表す。Befu (1966 & 1967) によれば、日本での贈り物のほとんどは、実際は贈り物のやり取りだと述べている。これは、全ての贈り物は贈る人と受け取る人との間の過去の関係の事実による。一旦、関係が考慮されると均衡に影響を与えるのは贈り物の価値ではない。

滞在中、主婦たちはアメリカ文化に適応してきた。日本と違いアメリカにおいては、時間が直線的に進むものだと考えられている。彼女たちのほとんどは過去や伝統にあまり関心を示さず、未来を重要視すると考えている (Althen, 1988)。人間関係は平等という考え方が強いので、一般的行動や人間関係においては儀礼的ではない。アメリカでは比較的少数の人たち、また、限られた人たちに贈り物をする。親戚や親しい人とプレゼントを交換する。贈り物をする場合はその人にとって特別な日 (例えば、誕生日、卒業式、結婚式、ハウスウオーミングなど) の時である。これらは個人の成長を祝ったり、新しい人々を歓迎する特別な日で、日常的に使えるものやその人が喜びそうな物を選ぶ。もし、金銭的な余裕がないならば高価なプレゼントは贈らない。普通、仕事の同僚や先生などの有利な取り計らいをする立場の人には贈り物をしない。礼儀正しくない、もし、お返しをするなら賄賂と見なされる。

日本人の主婦はアメリカに長く滞在し直線的時間の観念を身に付けている。そこで、帰国後は日本的伝統である「人間的時間」に従うことは難しくなる。別の言い方をすれば、社会的義務に基づく集団世界に縛りつけられている *magic and myth* の生命線が切れてしまったのである。これは彼女たちの中の「意識の構造」の変化、つまり、*perspectival consciousness / world structure* の芽生えである。この世界では、空間の意識と自我の出現が基になっており、日本人の贈り物にみられるような人々との感情的なつながりは消え失せている。帰国後は日本の伝統的人間関係とアメリカの平等主義に基づく人間関係を比較し、アメリカの方が日本の習慣より能率と実用性の点からも優れていると判断する。そのため、帰国後、友たちや親戚の人たちとの人間関係において、何らかのトラブルを経験する。

4) 日本の男性と女性との空間的、時間的、感情的分離

このサブテーマには、アメリカ男性と日本人男性のマナーの違い、夫婦関係の問題、帰

国後母親が仕事を見つけられない問題が含まれている。アメリカと比較し、日本ではジェンダーロール（性差）が明確に残存する。アメリカ滞在中は、主婦たちは新しい性差役割に関する文化的地平にさらされるため、これが帰国後の日本の男性についての見解に影響する。

今回の主婦たちは、渡米前は仕事をしてきた人たちもいた。しかし、夫の海外赴任が決まった時、妻としては、夫を助け企業のために尽くすことが大事と考え、仕事を辞め、その後、家族と一緒に渡米した。この点において、日本人女性の伝統的性差役割がみられる。しかし、アメリカ滞在中は、妻たちは新しい生き方と共に、日本より自由なアメリカの性差役割（平等役割）に触れた。滞在中は、日本での生活と比較して、自由な時間を持つことができた。夫と子供が出かけた後は、新しいことを学ぶため趣味のサークルやスポーツや英会話での授業に積極的に参加した。また、子供の学校や教会での女性ボランティア活動にも参加した。時には、自宅にアメリカ人夫婦や日系の友たちやアメリカ人の友たちを夕食やお茶に招待し、女主人としての役割を果たした。日本人主婦たちはアメリカでは会社の代表として夫婦同伴でパーティーに参加したり、日本の会社からの電話の対応で夫の仕事の手助けもした。つまり、彼女たちは人と関わり合うアメリカ的方法を学んだのである。さらに、自我意識の芽生え、つまり、これは支配、規制、征服といった何かに対する力を意味するのではなく、何かを生み出す能力のことである（Miller, 1986）。彼女たちが一人の人間として扱われていることや、他者により尊敬されていると感じたためである。女性のエンパワーメントである。他者と関わることで、自分の力に目覚め、他者と一緒に関わりを生み出そうとしている。

しかし、帰国後、彼女たちは他者との関わりを急に失ってしまう。夫は仕事に忙しく、妻とゆっくり話す時間がない。海外ではよい夫の役を演じてきた男性たちは、帰国後は“家族丸”を降り、変身し態度を変え、日本の方法で妻に接する。彼女たちは都会に住んでいるため友たちを作るのも容易ではない。また、年齢制限のため仕事に就くことができない。学校でのボランティア活動も日本ではPTAを除いては許されていない。要約すれば、帰国後の主婦の生活は重要な他者や夫や子供の生活から再び分離され、切り離されている。夫の場合は、人間関係が独断的（恣意的）で柔軟性がみられるが、彼女たちの場合は意識が滞在中に変化し、帰国後も持ち続けている。他者との関係が持てないことから生じる憂鬱な気持ち、特に喪失感を抱いていることはこの調査の中でも明らかとなった。これは、一般的帰国文化ショックとは異なり、深刻な女性の適応問題である。最も重要なことは、主婦たちの意識が高まっているため、以前の彼女たちとは同じではない。以前の彼女に何か新しいものが取り入れられ、エンパワーメントしている。

上述したように、主婦のアメリカ滞在による価値観の変化と解釈学的水平の拡大が帰国の状況に大きく影響している。この状況を理解するために、主婦のアメリカでの生活を見てみる。インタビューを通して、アメリカの文化的機会が主婦たちに変化をもたらしていることがわかった。1つは、会話の教室、ボランティア活動、スポーツ、趣味や勉強のサークルなど

の様々な活動に積極的に参加したことである。例えば、英語の授業では現地の女性の先生から語学と文化を学んだ。特に、アメリカ人女性たちは定年後、ボランティアで英語を教え、日本人主婦たちのための文化通訳者となっていたことがわかった。彼女たちはアメリカ文化を日本人主婦たちに紹介すると共に、彼女たちが日常生活において困った時など様々なアドバイスしてくれる相談相手となっていた。ある主婦は「これらの年配のご夫人たちが私たちの母親だった」と述べている。このように、アメリカ女性たちとの楽しい交流により、日本人主婦たちはアメリカのボランティア精神について自然に学ぶことができた。特に、アメリカ人は外国人滞在者たちが困った時には、無償で奉仕することに喜びを感じていることに主婦たちは驚きと感謝の念を抱いた。これらの年配のアメリカ女性たちとの出会いが日本人主婦たちの生活空間を大いに広げてくれたようである。

主婦たちの変化の2つ目の理由は子どもである。この子どもの存在が母親のためのアメリカ文化への架け橋となっていた。アメリカの初等教育と中等教育のほとんどの学校では、両親が子どもの教育に参加することを奨励している。例えば、子どもは学校の印刷物（連絡帳）を持ち帰る。これには、先生との会合日時を連絡したり、両親が担任の先生と知り合いになることを奨励したり、学校での子どもの生活状態を伝えるなど、勉学上や学校での適応の障害となっている問題を話し合ったりすることを両親に奨励している (Althen, 1988)。日本人母親たちは学校でのボランティアに参加し、アメリカ人の子どもや両親、教師たちと交流し、アメリカの教育を直に観察する機会を得た。もちろん、母親たちの中には英語が苦手な人もいたが、子どもの問題の方が最優先と考えたため、母親たちは多くのボランティア活動に参加した。ロパタ (Lopata, 1994) によれば、ボランティア活動は母親が目に見える仕事をたち成したり、コミュニティの価値観を維持したり、多くの人たちの積極的参加を奨励する機会を提供している。このように、子どもの存在が母親の生活に影響する機会を与えていた。また、学校でのボランティア活動ばかりではなく、教会やアメリカ人女性グループの集いや日本人企業駐在員の妻たちのグループでもボランティア活動は盛んであったため、母親たちは積極的に参加した。これらの活動は母親に社交の場を与え、様々なコミュニティ（地域社会）との関わりを持つことを可能にした。

3つ目の変化の理由としては、日本人主婦の潜在能力の開花である。アメリカでの滞在中、彼女たちは自由時間を持てたためテニスやゴルフを学び、トールペインティングやキルトなどの趣味の勉強も始めた。これらの活動は、個人的楽しみばかりではなく、新しい技術を学ぶ機会をも与えた。日本人主婦たちのほとんどは手先が器用なため、上達が早かった。重要なことは、アメリカでは個人指導が得られる上に、先生たちは生徒たちを激励し、個々人の才能と能力を伸ばす手助けをする。ある母親は、「私は日本では叱られることに馴れていた。両親や先生たちばかりではなく、夫や子どもにも叱られてきた。今まで誰にも誉められたことはなかった。アメリカ人の先生からの誉め言葉をもらった時はとてもうれしかった。それ

で、一生懸命にやろうという気になり、頑張った」と述べている。この主婦のトールペインティングの作品は優秀だったため、先生は彼女にクラフトショー（工芸展）に展示するように誘った。この達成感は帰国後の彼女の生活に大きな変化を与えた。現在、彼女は自分の店を開き、シャドウボックスの技術を近所の人たちに教えている。この先生のおかげで、彼女の潜在能力は開花し、自信、自尊心が高まった。彼女の場合、内なる自己潜在能力の開花（知的水平の拡大）、また別の存在の可能性（文化的水平の拡大）、別の行動の可能性がアメリカ滞在により広げられたと言える。

パーティーはアメリカ文化では重要な社会的機能を持つ。アメリカでは家でよくパーティーを開く。日本人主婦たちも夫が管理職である場合、会社の代表としてよくパーティーに招かれた。そのお返しとして、彼女たちもアメリカ人の友たちを夕食や昼食やお茶に招待した。この時、彼女たちは夫の仕事を積極的に支援し、アメリカ人妻たちのように自分が対等に扱われている気持ちを得た。ある主婦は、「このパーティーのおかげで、料理のレパートリーが増えた」と述べている。彼女は料理の上たちとともに、夫の仕事に関わったということで満足感を抱いた。日本では、主婦が夫の仕事や会社の活動に参加する場はないため、主婦たちはアメリカでの社会的、文化的行事に参加することに喜びを得た。主婦たちの中には、週末、美術館やコンサートに夫と出かけた人もいた。つまり、妻として、親密な友たちとして、また、平等なパートナーとして一歩進んだ夫婦関係が主婦という生活に新しい意味を与え、彼女の自己概念と自尊心を向上させたと言える。

このように、英語の学習、ボランティア活動への積極的参加、新しい技能の習得、パーティーの参加や家でのもてなしなどは主婦たちがアメリカ人と交流する機会を与え、彼女たちの生活を多忙にさせた。言い換えれば、日本での影の薄い、あまり報われない主婦たちとしての生活には主婦たちは挑戦し始めたと言える。ミラー（Miller, 1986）は人間にとって生活が単に生物学的なものではなく、心理的かつ知的なものであるのは絶対的に真理であると述べている。このように、多くの活動に参加することで、日本人主婦たちの精神は絶えず成長した。現象学的な観点からみれば、滞在経験を経て母親の文化的水平は拡大したのである。主婦たちは異文化を経験することで今までの見解に新しい見解が加わっている。つまり、異質なものが取り入れる側の好みに合わせて採用され、消化され、その文化の出会いのプロセスによって変化していくという文化的融合が行われた。つまり、これらの主婦たちは、自由が尊ばれ、個人主義が強く、またボランティア活動が強調されているアメリカでエンパワー（empower）したのである。この場合、パワーは支配、規制や身体上の征服といった力の概念ではなく、心理学的エンパワーメント（empowerment）である。ミラーによれば、力とは人を動かし、変化をもたらす能力であり、人の関係性を重視している。

しかし、帰国後、主婦たちは子どもの教育問題や夫の問題に加え、彼女たち自身の問題に直面する。特に女性の場合、健全な人間関係を築けなかったり、また、対人関係の問題があ

る場合、ディスエンパワーメント (disempowerment) を経験している。また、同じ経験を分かち合う相手もなく孤立したり、地域社会との以前のようなつながりをもたないため、ディスエンパワーメントした人も存在した。この調査で明らかのように、大抵の場合、主婦たちはほとんどの状況を批判的にみている。これは、悪いという意味ではなく、現象学的に言えば世界を受け身的ではなく、問題があるものと積極的に解釈していることを示す。これが、主婦の不安を増大させ、フラストレーションの度合を強めている。筆者は帰国した人たちを苛立たせ、欲求不満に陥らせているのは「他者」ではなく、逆に帰国者自身にあるのではないかと考える。なぜなら、このディスエンパワーメントな状況では主婦が思うように社会と関わり合いながら、生活することが困難だからである。また、二つの文化の間に違いを認識した時のみ、人は比較し、そして良い方を選択する。これらの変化・差異は、選択の可能性を与える必須条件である。これらの差異のため、帰国した主婦たちは自分の文化の中で疎外感を抱いた。これが帰国文化ショックの本質である。帰国後の文化ショックがアメリカでのカルチャー・ショックの度合いよりも強いのは、彼女たちのアイデンティティが変化したためである。彼女たちはアメリカで見つけた新しい生き方を日本の社会や文化の中で共に構成してゆく準備ができていないためである。

6. 近年の研究と今後の課題

筆者は1996年に本調査を実施し、2000年にその研究成果をまとめ本を出版した。その後、いくつかの新しい研究が行われた。まず、佐藤 (2003) は主にマレーシアを調査地域とし、海外駐在員の異文化適応問題について研究を行い、語学力不足、滞在国の制度、文化の違い、現地社会や現地の日本人社会との対人関係、日本への帰属意識といった5つの問題点を挙げた。もう一つは文化人類学の視点から、アメリカに滞在している駐在員妻に注目し、グローバルと文化移動 (Kurotani, 2005) をテーマとした研究である。この研究では、母親たちはアメリカではrelational agencyと働く (=他者との関係を強化、つまり海外では日本では持ちえない家族と一体感あり、特に夫や子どもとの間に芽生えた新しい親密感を持ち、彼らのために積極的に家事に専念する)。日本のこれまでのグローバル化プロセスを考慮すると、一般的に日本人が海外に行く、逆に海外の人が日本にくることによって、物事や観念のような様々なことが変わっていく。しかし、駐在員妻たちは夫について海外に行っているにも関わらず、日本国内にいた時と同様に妻役割と母役割が要求されている。日本的ジェンダーロールは海外でも存在し、再生産される。そのため、駐在員妻は日本のグローバル化プロセスの中の一種のジレンマ的な存在になってしまう。筆者の研究では、駐在員妻たちの多くは積極的にアメリカ社会に適応していく姿がみられてきたが、Kurotaniの研究では、駐在員妻たちはアメリカに実在する日本人社会に閉じこもり、アメリカの現地社会とほとんど接していないことが指摘された。また、駐在員妻たちは海外生活をする事により、様々な人々と出会い、違う

生き方を知りえることが可能である。そのため、これまで考えていなかった自分の生き方や夫婦の在り方等を考え直し、結果的に彼女たちの結婚の危機や離婚になってしまう場合も見られた。その一方、Kurotaniは「内」と「外」の概念を用いて、母親は家を守り夫は仕事をするという海外での役割分担が容易にできることを説明し、それによって夫婦間の繋がりが強くなり、平等的性差関係 (egalitarian partnership) が形成されることも提示した。最後に、Kurotaniは、文化移動には、自己表現や家族関係や文化アイデンティティの変化の可能性がある」と論じている。

長谷川 (2003) は米国からの帰国女性を対象とし、逆カルチャー・ショックの試行的研究を実施した。その結果から、調査対象者113名のうちの77%の人は逆カルチャー・ショックと葛藤を感じていることが分かった。長谷川の研究結果には3つの特徴が見られた。まず、対象者の多くは逆カルチャー・ショック、すなわち日本社会での女性の地位や女性への規制、そして日本的コミュニケーション・スタイルの規範などに違和感を持っていた。また、筆者の調査結果と一致し、帰国した日本人女性は、日本人観すなわち伝統的な価値観と態度 (贈り物、お中元などのつきあい、グループ志向など) に対し疑問を持っていた。さらに、海外で生活したことにより、帰国した女性たちの視野が広がり、コミュニケーション・スタイルも変化し、自我の確立がみられた。

上述した近年の研究結果を踏まえ、アメリカ在住の日本人駐在員の妻だけではなく、東南アジアや中国に在住する駐在員の妻の異文化適応プロセスを明らかにし、各国のデータを比較することを今後の課題としたい。また、企業駐在員妻のカルチャー・ショックとジェンダーロールとの関係の研究をしつつ、女性特有の異文化適応プロセスを提示していきたい。

邦文引用文献

- 秋山剛 (1998) 「異文化メンタルヘルスの現在」『こころの科学』77, 14-22。
- 伊佐雅子 (2000) 『女性の帰国適応問題の研究』多賀出版。
- 伊佐雅子 (2007) 「女性と異文化適応」『改訂新版 多文化社会と異文化コミュニケーション』pp. 161-177、三修社。
- 大塩その子 (1988) 「在米邦人家族の異文化体験」修士論文。
- 大西守他 (1990) 「海外駐在員の妻たちの精神医学的問題」『臨床精神医学』19 (11)、1715-1721。
- 佐藤良子 (2000) 「海外駐在員妻の異文化適応研究に関する一考察」『異文化コミュニケーション研究』3号、155-170、愛知淑徳大学院異文化コミュニケーション。
- 佐藤良子 (2001) 「欧米を中心とした海外駐在員妻の社会的支援ネットワーク」『ヒューマンコミュニケーション研究』29号、11-26。

- 佐藤良子 (2003) 「海外駐在員妻の異文化適応—在マレーシア海外駐在員妻の事例研究からみる現状と課題—」『月刊グローバル経営』267 巻号、22-25。
- 澤田昌人 (1996) 「音声コミュニケーションがつくる二つの世界」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』叢書・身体と文化、第二巻、222-243、大修館。
- 滝浦静雄 (1976) 『時間—その哲学的考察—』岩波書店。
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』日本放送出版会。
- 長谷川典子 (2003) 「逆カルチャー・ショックの試行的研究—米国からの帰国女性」『北星論集(文)』、第37号、71-80。
- 三善勝代 (1998) 「海外派遣勤務者の配偶者の生活と意識」『和洋女子大学紀要(家政系編)』38, 67-76。
- 三善勝代 (1999) 「海外派遣勤務者の配偶者の生活と意識」『和洋女子大学紀要(家政系編)』39, 57-69。
- ムトー ヒロコ (1993) 『妻たちの海外駐在』文藝春秋社。

英語引用文献

- Althen, G. (1988). *American ways*. Yarmouth, Maine: Intercultural Press.
- Befu, H. (1966 & 1967). Gift-giving and social reciprocity in Japan. *France-Asie /Asia*, 188, 161-177.
- Bachnik, J. (1986). Time, space and person in Japanese relationship. In J. Hendry (Ed.), *Interpreting Japanese society: Anthropological approaches*. JASO: Oxford.
- Brabant, S., Palmer, C.E., & Gramling, R. (1990). Returning home: An empirical investigation of cross-cultural reentry. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 387-404.
- Bowers, J., Metts, S., & Duncanson, W. (1995). Emotion and interpersonal communication. In M. C. Knapp & G. Miller (Eds.), *Handbook of interpersonal communication*. Beverly Hill: Sage.
- Church, N. (1992). A sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- Davis, K. H. (1976). The use of social learning theory in preventing intercultural adjustment problems. In P. Pedersen, W. J. Lonner, & Dragus (Eds), *Counseling across cultures*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Geber, J. (1974). *Ein Mensch zu Sein*. Bern: Francke.
- Geber, J. (1984). *The ever-present origin*. Trans. Noel, Bastad with Algis Mikunas. Athens: Ohio University Press.
- Gibson, J. (1950). *The perception of the visual world*. Boston: Houghton Mifflin.
- Gullahorn, J., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 14, 33-47.

- Hall, E. T. (1966). *The hidden dimension*. New York: Doubleday.
- Hall, E. T. (1983). *The dance of life*. New York: Doubleday.
- Kataoka, T. (1992). Class management and student guidance in Japanese elementary and lower secondary schools. In R. Leestma & H. Wallberg (Eds.), *Japanese educational productivity*. Center for Japanese Studies. The University of Michigan.
- Kamo, Y. (1993). Determinants of marital satisfaction: A comparison of the United States and Japan. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 551-568.
- Koester, J. (1983). The intercultural reentry: A communication perspective. Paper presented to the annual meeting of the Society for Intercultural Education, *Training and Research*. San Gimignano, Italy.
- Kumon, S. (1982). Some principles governing the thought and behavior of Japanologists (Contextualists), *The Journal of Japanese Studies*, 8, 1, 5-28.
- Kurotani, S. (2005). *Home away from home: Japanese corporate wives in the United States*. Durham, NC: Duke University Press,
- Lebra, T. (1976). *Japanese patterns of behavior*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lopata, H. (1994). *Circles and settings: Roles changes of American Women*. Albany: State University of New York Press.
- Martin, J. (1986). Communication in the intercultural reentry: Students sojourners' perceptions of change in reentry relationship. *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, 10, 1-22.
- Mickunas, A. (1973) . Civilization as structures of consciousness. *Main Currents in Modern Thought*, 29, 179-185.
- Miller, J. (1986). *Toward a new psychology of women*. Boston: Beacon Press.
- Nakamura, H. (1968). Consciousness of the individual and the universal among the Japanese. In C. A. Moore (Ed.), *The status of the individual in East and West* (pp. 141-160). Honolulu: University of Hawaii Press.
- Nakane, C. (1972). Social background of Japanese in Southeast Asia. *The Developing Economies*, 10.
- Pryately, M. J. (1989). *The adjustment of a community of sojourning Japanese housewives*. Unpublished doctoral dissertation. The University of Oklahoma, Norman.
- Rohrich, R. F. & Martin, J. (1991). Host country and reentry adjustment of student sojourners. *International Journal of Intercultural Relations*, 15, 163-182.
- Smith, R. (1983). *Japanese society: Tradition, self and the social order*. New York: Cambridge University Press.
- Stewart, D. , & Mickunas, A. (1990). *Exploring phenomenology : A guide to the field and its literature*. Ohio University Press.
- Thompson, F. (1984). A Comparison between the Japanese approach to external space (kawaii) and

- Western 'common place'. *Japan and America*. Lidon, Utah: Pacific Institute of Cultural Studies.
- Uehara, A. (1986). The nature of American student reentry adjustment and perceptions of the sojourn experience. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 415-438.
- Ulin, R. (1980). Household work, wage work, and sexual equality. In S. F. Berk (Ed.), *Women and household labor* (pp. 275-292). Beverly Hills, CA: Sage.
- Verthelyi, R. (1995). International students' spouses: Invisible sojourners in the cultural shock literature. *International Journal of Intercultural Relations*, 19, 3, 387-411.
- Yamada, R. (1993). *The gender roles of Japanese women: An assessment of the gender roles of Japanese housewives living in the United States*. Unpublished doctoral dissertation. University of California, Los Angeles.